

# 大津 歴博 だより

企画展

2003  
No.51

## 描かれた幕末の琵琶湖

—湖・里・山のなりわい—

5月21日(水)～6月15日(日)



「琵琶湖眺望真景図」(部分) 本館蔵

慶応2年(1866)頃、四条派の絵師広瀬柏園は、大津港の沖に船を浮かべ、見渡す景色をスケッチしました。瀬田唐橋からはじめ、琵琶湖南湖を反時計回りに描き、最後は尾花川で終わる約8.5mに及ぶ作品です。柏園65歳、晩年に近い高齢でしたが、彼の筆は正確に目に映るモノを写し取っており、多くの情報を伝えてくれます。



大津市歴史博物館

# 「描かれた幕末の琵琶湖」 —湖・里・山のなりわい—

琵琶湖眺望真景図から見えてくる幕末

慶応二年（一八六六）、四条派の絵師広瀬柏園（ひろせせいたん）は「琵琶湖図」と題された絵巻を仕上げます。湖上から見渡す南湖の風景を描いたパノラマ絵巻ですが、この元となったスケッチが、当館蔵の「琵琶湖眺望真景図」です。本誌第三六号で紹介した作品ですが、そこでも指摘しているように、この作品は幕末の情景をリアルに伝えており、多くの情報を読み取ることができます。当時の日常風景が切り取られてそこにあるからといえるでしょう。本展では、この作品から読み取れる情報を、関連資料と併せて紹介し、身近な景観の変貌を考えようとするものです。

## 湖上の丸子船

この作品で特に注目されるのは、湖上で活動す

る人々の姿が活写されていることです。柏園が湖上で描いていることを思うと当然ですが、彼の周りに浮かぶたくさんの船が描かれています。

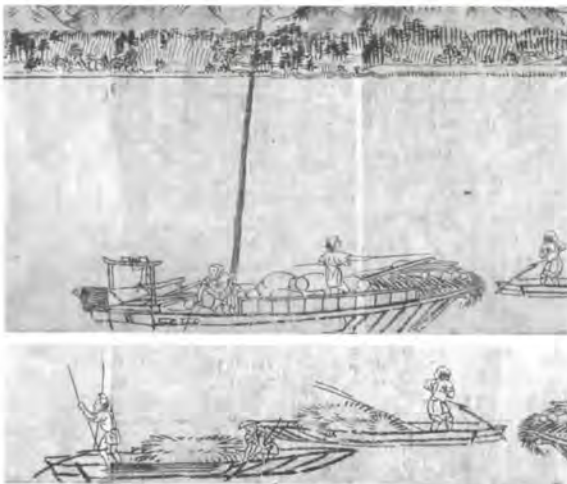
まず目に付くのが、琵琶湖独特の木造和船「丸子船」です。鉄道開通以前、琵琶湖の湖上交通が盛んだったことはよく言われてきましたが、その主役が丸子船でした。でも江戸時代の丸子船が、どのような姿だったのか、確認できる資料を欠いていたのも事実です。民具なども同じ運命ですが、あたりまえに目の前にあったものは、意外と記録されず時間の中に埋もれてしまうことがよくあります。その意味でこの作品は、一八六六年ごろの丸子船を正確に伝えており、注目されます。

また大津に入港する直前のため、帆をおろし、舵を上げ、陸揚げの準備に荷物の整理をする姿が捉えられている点も、当時の操船の様子が読み取られて貴重な情報といえるでしょう。

## 藻を採る農民たち

次に多く描かれているのは、湖中の藻を採る船です。湖岸（内湖岸も含めて）の農村では、化学

肥料が普及する前、有機肥料として藻や泥が盛んに利用されてきました。明治一三年の統計（『滋賀県物産誌』）を見ると、湖岸のほとんどの農村が藻や泥を肥料として利用していたことが窺えます。二本の竹の一箇所を縛り、はさみのようにして藻をまきつけて採る方法です。藻を採取する目的だけでなく、日常的に小型の木造和船が利用され、田船と呼ばれていました。湖岸農村では、集落から耕地へ行く道が水路しかなく、現在の軽トラックのような感覚で田船が利用されていたので



丸子舟を操る（上） 藻を採る（下）

す。

近江八幡市の西部、湖岸に面した村々が明治五年（一八七二）に提出した『農具取調絵図書上帳』という冊子があります。この年全国規模で農具調査がおこなわれ、提出された一冊の控えと思われます。ここには三五点の農具が描かれていますが、中に船（田船）・櫓・棹・突桶といった操船道具や、泥かき・藻かきといった道具も含まれています。藻かきも竹二本を縛ったものから、先に針の付いた形状に変わっているのは、時代の変化といえるでしょう。湖岸農村では、こうした船や湖上で利用する道具も農具の一つと認識されていたのです。

農具取調絵図書上帳 個人蔵（上下とも）



### はげ山、その再生

眺望真景図に描かれた湖南の山々を見ると、赤く彩色されている部分が目立ちます。はげ山だったところす。山々の荒廃が進んだ理由は定かではありませんが、都に近く、運び出すのに便利な水運（湖や川）があつたため、古くから用材供給地として伐採がすすんだようです。木の再生には、大変長い時間が必要です。まして地肌が侵食された状態では、昔の姿を復活させることは難しいでしょう。

明治六年（一八七三）<sup>たなか</sup>田上地区の地籍図を見ると、山々が茶色に塗りつぶされており、はげ山だった印です。花崗岩質で、荒廃がすすみ植林もままならぬ状況にあつたようです。雨が降ると土砂が流出し、川底に沈殿して琵琶湖の水位にも、また、下流の淀川や大阪湾にも影響を与えていました。

明治時代になると、大阪港の築港を目的に、流入する土砂を防ぐため、淀川流域の治山事業が政府の手によって進められます。オランダ人技術者



地券総絵図 関津村 明治6年

も加わり試行錯誤が重ねられ、山々に緑を復活させる地道な作業が行われました。現在では、かつてはげ山だったところも、見違えるように緑が根付き、今もこの努力が続けられています。

#### 観覧料 一般 四〇〇円（三二〇円）

高大生 三〇〇円（二四〇円）

小中生 二〇〇円（一六〇円）

（ ）内は一五名以上の団体、市内在住の六五歳以上の方・障害者の方の割引料金

休館日 月曜日

## 第33回ミニ企画展

# 大津・戦争・市民

■ 7月23日(水)～8月31日(日)

大津と聞けば、すぐにイメージするのは、琵琶湖、近江八景、琵琶湖に浮かぶ汽船など、観光に関した言葉が多いのではないだろうか。しかし、今から六〇年ほど前、大津市は「軍都」としての顔を持っていました。第二次世界大戦のさなか、昭和一六年に大津連隊区司令部、翌一七年に大津海軍航空隊、一八年に大津陸軍少年飛行兵学校、さらに戦争末期の一九年には滋賀海軍航空隊が発足し、別所から唐崎にかけての一带は、軍の関係施設で埋まったのです。またそれよりずっと以前の明治八年(一八七五)には、陸軍歩兵第九連隊が別所(現御陵町)の地に駐屯しています。

本展では、そういった「軍都」としての顔を持った大津の歴史を、明治以来の軍事施設のあゆみや、戦時中の市民生活に焦点をあてながら、貴重な資料や写真などによって紹介します。

なお掲載写真は、「軍隊生活実写絵ハガキ」(山野讓氏寄贈)のなかの一枚。



第九連隊第三大隊食事風景

## 第34回ミニ企画展

# 坂本の美術 — 公人屋敷の絵画 —

■ 9月2日(火)～10月13日(祝)

山門公人とは、延暦寺一山を統轄・運営する三執行代、八学頭代のもとで、諸堂・諸役の寺務にあたった役人です。その住居であった公人屋敷は、ただ一軒のみが江戸時代の姿をとどめつつ現存しています。その屋敷は、近代に改築を受けているものの、邸内・室内の造作からは、公人の社会的立場や暮らしぶりを窺うことができます。同時に、この屋敷には、京都の町衆の住宅さながらに、床の間を飾る書画や間仕切りの襖絵、室内空間を隔てる屏風・衝立等、書画一式が多く伝来していました。書画のジャンルも、禁裏や幕府の御用絵師の作品から、京都の写生画派、および文人画にいたる、江戸時代中期から明治時代にわたる多彩なものです。それらは賓客の応接や、人々との交遊にあたり、歓待の証しとして、また、室内に四季の情趣を添える演出として、しつらえられ、屋敷内部を彩っていたのはいうまでもありません。本展では、公人屋敷の御当主から受託した書画の一端を公開し、文人としての顔をあわせもった公人の側面を紹介いたします。



竹に双鶏図 堀索道筆

# 収蔵品紹介

## 43

### 君子隠山図 淡海槐堂・富岡鉄斎筆 一幅 明治三年（一八七〇）個人蔵

淡海（板倉）槐堂（一八二二～七九）は、志士・文人として幕末明治に活躍した人物です。彼は、近江国坂田郡下坂中村（現在の長浜市）の下坂家に生まれました。明治に京都で重きをなした文人、江馬天江は彼の実弟です。

幼少より学を好んだ彼は、弱冠にして裕福な京都の薬商武田家に養子として迎えられるとともに醍醐家の侍太夫として仕え、板倉の姓を賜りました。そして、義侠に富んだ生来の気質もあって、嘉永六年（一八五三）頃から梁川星巖、梅田雲濱らと国事に奔走。文久二年（一八六二）には演武場の並修館を創設・主宰し、ここに真木和泉、坂本龍馬、武市瑞山、中岡慎太郎、藤本鉄石ら勤皇

の志士が参会しました。ちなみに、龍馬が非業の死を遂げたとき、床の間に掛けられていた血染めの掛け軸は、暗殺当夜に龍馬の寓居を訪れた槐堂が、彼に贈ったばかりのものでした。志士に対する槐堂の後援は、「天誅組の乱」や尊攘派の公卿が政変に失敗した「七卿落ち」への援助をはじめ、資金・物資とも多大に及び、そのため、禁門の変の後、捕らえられて慶応三年（一八六七）まで獄中生活を送っています。

明治維新後は、その功績を認められ、大津裁判所参謀や待詔院下局、宮内中祿に任じられるものの、本作が描かれた明治三年には官を辞し、板倉姓も返上して淡海姓を名乗り、書画や詩作に自適



君子隠山図

右上の漢文：富岡鉄斎の題語

左上の漢文：淡海槐堂の題語

する余生を送りました。その周辺には、本作で合作をしている富岡鉄斎をはじめ、谷鉄臣、山中信天翁、岡本黄石、神山鳳陽、江馬天江ら文人ばかりでなく、北垣国道、犬養木堂など政治家の名もみられます。

とりわけ、鉄斎とは親交があり、本作の箱書きにも、「余と槐堂翁、親善にして会う毎に詩酒を興に資して文墨を為す」と鉄斎が記しているように、槐堂・鉄斎の合作が何点も確認されています。そればかりでなく、槐堂は、鉄斎の書画に影響を与えていたようです。新奇を好んだ槐堂は清朝（中国）の書や金石学の書に傾倒していましたが、本作をみると、槐堂と鉄斎の書風が酷似しているのがわかります。国学者として志士と交友していた鉄斎が、槐堂の人物に敬意を抱き、兄事としていたことを示す作品といえます。ちなみに本作品も、酒を酌み交わしている間に槐堂が揮毫した絵（岸に群生する蘭）に、鉄斎が溪流、岩、靈芝を描き足した作品であることが、賛文と箱書きから判明します。

（横谷 賢一郎）

※三二企画展「坂本美術」出品作品

# 学芸員のノートから

## 常信寺釈迦如来及び両脇侍像雑感

大津市大石富川の常信寺には、釈迦如来坐像と両脇侍像（重要文化財）が伝来しています。これらの像には極めて興味深い特徴があります。

まず「胎内漆箔」が挙げられます。胎内の内割は本来見えない部分ですから通常、荒めの鑿跡をのこしたままにしておくことが多いのですが、この像は、内割を施し、漆を塗布した後に金箔を貼着させるといふ非常に丁寧な技法をつかっています。体の中も金びかなのです。しかも三体ともこの遺例は少なく、しかも皇族や貴族に関する造像にみられるもので、極めて贅沢で手の込んだ造像です。仏の胎内を神聖視するところからきてい



重要文化財 木造釈迦如来坐像 常信寺蔵

るといふ説もあり、院政期にみられるものです。

第二の注目すべき点として、面中部に「あたり」かと思われる、縦一条、横八条の墨線が認められること



同像・像底

です。これは、表面仕上げが剥けてしまった為に現在確認できるのですが、本来は観ることが出来ない、仏師の造像時に関する裏情報なのです。素地のの上に、正中に墨線を引き、さらに髮際や眼尻、鼻、口など各部位の位置を横線で確認しているように描いています。この像自体を造像するための「あたり」線というのは、この像はすでに完成していることから無理で、例えば、完成した後に関帳面な仏師が確認のために引いたという可能性も考えられますが、私は、仏所内での規範となるべき像として造られ、これを見本にして他の像を造像していたのではないか（例えば師匠が造っておき、弟子が真似する等）、そして、その後仕上げられ、寺院に納められたのではないかなどと、

想像しています。院政期はオートメーション方式で仏像を大量生産していた時代で、事実、この像に良く似た感じの像が他にも伝来していることから、その念を強くします。

本像が本来どこで造られ、どこの寺院に安置されていたのかは全くの不明ですが、以上のことにより京都の然るべき仏所で造像され、藤原氏等の有力者の発願によりその縁の寺院に安置されていったものと想像されます。

常信寺像は、見た目も大変立派ですが、造像の見地からみても興味深い像なのです。（寺島 典人）



同像・面中部

大津歴博だより No.51

平成15年5月20日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100

ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>